

水にふれてそして学んで

奈良学園中学校 二年

成本 康洋

水は、人間にとって必要不可欠な存在である。テレビの報道番組で、世界の水不足や水質汚染などを見ていると、水を大切にしないといけないなあとか、それらの問題に対して自分に最低限何ができるのだろうかと考えてしまう。どんどん水について興味や疑問が沸いてくる。

水とは、おもしろいものだ。雨水は山から地層をゆっくりと通って川となり、海に流れ出て雲となって、そして雨となってまた山に降ってくる。水の循環というものだ。山の水は、とてもきれいで、ミネラルなどの栄養分が含まれている。よく「山は海を育てる」というが、木は土壌をよくする性質があり、そこを通った水は栄養のあるよい水となるからだ。漁師が植林をするのは、海に栄養のある水を流すことでプランクトンがよく発生し魚

がよく育つからだ。そして森を育くむには、人の手が必要だ。森を間伐したり整備をすることだ。そのかわりに山は、きれいな水を、人間にくれる。実に良いシステムだと思う。私は、水に興味があつて、水によつてもたらされた生命にも興味がある。だから私は水にふれて水のことを学んでいるわけである。私は今、水に関して次の二つの活動をしている。

私は、奈良県の生駒市に住んでいる。大阪府と奈良県とを結ぶ古くからの街道である「暗峠」の途中に西畑町という集落がある。西畑町には、古くから棚田があるが、第二阪奈道路の工事によつて地下水の流れが変わり、二十年近くも前から水が流れてこなくなつて、棚田が使えなくなつたとのことだ。この西畑町には、「いごま棚田クラブ」と

いうボランティア団体が活動している。これは、会社を定年退職された後に、シニア自然大学を卒業した方たちが始めた団体だ。生駒市民だけでなく遠く京都府や大阪府から参加される方もいる。この「いま棚田クラブ」の活動目的は、荒れ果てた西畑町の棚田を再生することだ。僕は、今年の春からこの活動に参加している。第二阪奈道路が開通したことにより、大阪と奈良との行き来が楽になり、大阪に住む祖母の家に早く行けるようになってきた。しかしこの活動に参加することによって棚田に水がなくなつたことを聞きとても驚いた。この棚田に水がいっぱいになることはない。棚田は本来の役割を果たせず可哀想だ。けれど、このクラブの方々のように棚田を畑にしたり梅の木を植えたりそれぞれが棚田の活用の道を考え行動することは素晴らしいと思つた。だけどやはりそこに水が必要であることは事実である。これからもこの活動を続けていきたい。

私の通っている奈良学園中学校は、大和郡山市の矢田山にある。敷地の半分が山で、沢も流れている。敷地に近世まで使われていた

隠田がある。今は使われていなくて荒廃している状況だがきちんと整備して稲を植える予定だ。また校地内の池にニッポンバラタナゴを放しドブガイを放流した。ニッポンバラタナゴは日本固有種で日本で純系はほぼ絶滅に等しく保護が求められていて奈良学園で保護しようとしている。

この魚を絶滅に追い込んだのは人間のせいだが、人間は自分のやつた間違いに気づき、また、その数を増やそうと努力している。私は、水とふれて学んで、今人間は、水と共に生きてはいないと思つた。今は、人間の勝手のままである。水に感謝してその水に恩返しができる社会になればそれは、「水と共に暮らす社会」であるといえるのではないだろうか。私と思う。多くの人が自然に水に感謝できるときがくることを願いたい。